

7月CPは需給緩和するも原油急騰でプロパン380ドルか

1. <急反騰する原油価格>

①中東危機再燃

18日からのペルシャ湾危機でさすがに原油価格は大きく反騰した。オマーン沖の日本の海運会社が運航していたタンカーが攻撃された。誰がやったのかは判然としない。しかし、今回はこれに続いてイラン革命防衛隊による米軍無人機の撃墜事件が起こった。トランプ大統領はイラン空爆10分前に空爆停止命令を出したが、中東政治情勢は一気に緊迫した。撃墜がイラン領空なのか、国際領域なのか、わからない。米軍など多国籍軍が「イラクに大量破壊兵器あり」として、2001年イラクに軍事侵攻したが、結局何もなかった。そんなことがイランでも行われないうにしなければならない。欧州のメディアは米国の論調には懐疑的だ。一連の事件で17日には51.93ドル/バレルだったNYMEXのWTIは25日には57.83ドルまで上げた。26日には59.38ドルと60ドルに接近した。27日この記事執筆時点では59.16ドルとなっている。7月CPには大きな影響を与えそうだ。

②フィラデルフィア製油所事故

原油急騰要因をもう1つ。21日に発生した米国東海岸のフィラデルフィアの製油所火災だ。来月に閉鎖されるとの報道だ。同製油所の精製能力は東海岸で最大規模の335千バレル/日。夏のドライブシーズンにガソリン供給が細る懸念が広がった。7月4日は米国独立記念日。今年は木曜日。例年この週のガソリン需要がピークとなる。米国民の多くが4連休をとる。ドライブだ。6月最終週のガソリン出荷量は急増する。最悪のタイミングでの事故。ガソリン先物が26日に一時5%上昇し、原油市況も大幅ツレ高となった。同製油所ガソリン在庫を全部出荷した上で7月から稼働停止としたのだ。先物にも買いが及んだ。何も中東危機だけが原油を急騰させるのではない。この事故を受けて他の製油所は原油調達を増やして、ガソリン増産に乗り出した。21日現在の米国原油在庫は前週比1,280万バレルの大幅減少となったが、28日には更に減少するだろう。

2. <原油ほどは上げていない国際LPガス市況>

原油市況が中東危機を反映して急反騰している割には、LPガス市況の上げたまだ相対的には小幅だ。モントベルビューのプロパンは6月17~19日には210ドル/トナ前半にとどまっていた。第5週(24~28日)前半には230ドル台半ばまで上昇となった。中東CPプロパン先物市況は、さすがに危機勃発地の緊迫感から第4週前半の350ドル台から後半には370ドルに上昇。更に第5週前半には370ドル台前半へと週間20ドルの上げとなった。国際LPガス市況をもう少し詳しくみていく。

① モントベルビュー (MB) 市場

6月第3週のプロパン市況は200~228ドル、ブタンは200~219ドル。第4週はプロパン212~233ドル、ブタン210~231ドルと週後半に上昇、特に週末21日が最高値となった。原油高騰を反映したものだが、意外なほどの「小幅上げ」にとどまった。しかし、第5週前半は前週末の高値を引き継ぎプロパンが240ドル台半ば、ブタンが260ドル前後となっている。ブタンの上げ幅が大きいのは、原油高騰に伴ってガソリン市況が上げたため。ガソリ

ンにはブタンが混入されるほか、高オクタン価基剤のアルキレーションの原料イソブタンの需要が増加するためだ。

プロパンはいうまでもなく不需要期。ところが米国の石油需要の47~48%を占めるガソリンの需要ピーク期。ガソリン生産量は1,000万バレル/日を超える。このために必要な原油処理量が1,700~1,730万バレル/日にもなる(ガソリンは輸入もしている)。製油所生産のプロパンも215~220万バレル/日(約17.7万ト/日)になるわけだ。この増産プロパンを在庫として積み上げて、11月からの需要期入りに備える。ただ、2018~2019年冬は大寒波も波状的に訪れたが、総じて暖冬。特に3月は高気温。需要が伸びなかった。6月14日時点の全米プロパン在庫は74.5百万バレル=599.8百万トで前年比137.7%の超高水準。これも原油急騰の影響を緩和した。

今の日本は米国からプロパン全輸入量の80%を輸入している。米国のLPガス事情をつぶさに知らなければならない。

②スポットフレート

USGC~極東120ドル 2018年の米国のプロパン輸出量は2,865万トだ。世界のVLGCがメキシコ湾岸(USGC)に集まる。USGC~極東のスポットフレートは現在驚きの120ドル/ト。昨年の今頃の3倍だ。アラビア湾~日本(AG~JPN)のスポットフレートは現在80ドル/ト。前年同期は20数ドルだった。

こうしたフレートの急騰の最大の要因はLPガス貿易量の拡大にある。それも米国からの輸出が急増し、喜望峰経由やパナマ運河経由で大半がアジアに流入していることにある。船足が大幅に伸びている。今年の場合は、これに輸入急増のインドでの滞船が増加したことがある。

2020年は初っ端から国際海事機関(IMO)の船の燃料油品質規制が始まる。S分3.5%の燃料を0.5%にしなければならない。バンカーC重油など使ってられない。A重油やディーゼルを使うこととなる。当然燃料コストは上昇する。スポットフレートもまた一段高になる。「VLGCの燃料は2,000円/ト上昇する」とある輸入元売は試算している。玉そのものは今日急増で値下がりしても、フレートは大幅上昇を続けることとなる。

③中東CP先物市場

6月第3週のプロパンは350ドル台半ば、ブタンは330ドル台前半だった。これが本紙前回の「7月CP予測プロパン350ドル」の主要な根拠となっていた。しかし、翌第4週にはプロパン370ドル台半ば、ブタン350ドル台後半へと大幅上げとなり、第5週前半にはそれぞれ370ドル台後半、340ドル前後となった。

カタール、アブダビ、サウジの7月積みターム玉のアクセプタンスは、どこもほぼ買い手のノミネーションどおりの積みに収まったほか、カタール、サウジなどは一部を前倒しでの積みを要請してきた。これは、インド勢が7月積みをキャンセルしてきたことの影響で、インドの需要低迷と在庫高が改めて浮き彫りとなった。更に、3カ国ともスポット玉の販売に出たとも伝えられており、中東のLPガス需給の緩和が明らかになった。米国から極東へのプロパンだけでなく、ブタンカーゴの流入も増加しているほか、日本の大手輸入元売などがカナダの玉の受入れを開始したことも影響している。したがって、中東のFOB市況は、原油上げに沿って上昇するものの原油の上げ幅に比べると

小幅。需給緩和と異常なフレート高から、この不需要期に中東産ガスの唱え値で買うトレーダーもエンドユーザーもいない。プロパンで「7月CPレス数ドル」、ブタンで「7月CPレス 10ドル台」が買い唱えだ。中国勢がトレーダー勢と取引する価格も下げ基調となった。

④極東CFR市場

極東CFR市況は6月第3週にはプロパン 388～416ドル、ブタン 369～398ドルだったが、第4週にはそれぞれ 408～427ドル台、388～409ドルまで上げた。翌6月第5週はプロパン 410ドル台前半、ブタン 410ドル弱となっている。中東市場に比べると、極東の上げ幅なやや大きい。これにはAG～JPNのスポットフレートの 80ドルへの高騰が織り込まれての相場。特に米国産プロパンカーゴの売り唱えは「7月CPプラス 75ドル以上」にもなった。しかし、エンドユーザーもこれに乗っかるほど甘くはない。日本勢など買い意欲をまるでみせなくなってしまった。トレーダーなどはMB市況と極東CFR市況の格差拡大でしきりに空船をUSGCに向かわせ、いたずらに「スポットフレートを高めた」感がある。中国のPDH用プロパンの買いは出ているが、CFR日本とCFR中国には以前のような 15～20ドル格差はなくなっている。LPガス市場だけ見れば、総じて大幅軟化局面は続いているのだが、原油上げが相場を引き上げている。エンドユーザーは我慢のしどころだ。

⑤現段階での7月CP予測

このように見てくるならば、現段階では7月CPは6月CPに続いて大幅続落となると予想される。原油市況の動きいかに関わっていることはいままでもないが、原油は5月22日以来の 60ドル超も考えられることから、7月CPは直近の中東先物市況であるプロパン 380ドル台前半、ブタン 370ドル程度が予測されるということになる。